

ピョンチャンパラリンピックでの取材活動を終えて

NHK初の試みとして障害のある人の中から公募で選んだ3人のリポーターは、大会期間中、パラアイスホッケー日本代表の試合の中継や現地のバリアフリー事情、海外の有名選手へのインタビューなど、現地でさまざまな取材活動に取組みました。



後藤リポーター 千葉リポーター 三上リポーター

【リポーター3人のコメント】

<後藤佑季リポーター>

パラリンピックの会場は、どの選手も、どの応援の人も、みんなが輝いていて、想像以上にすてきな場所でした。パラアイスホッケーの韓国チームを取材しましたが、全ての試合がほぼ満席。お客さんに聞いてみると初めて見る人がほとんどで、「こんなに面白いなら、また絶対見たい！」と多くの人が言っていました。会場に足を運んだきっかけは、学校の授業でやったから、好きなアーティストが広報大使だから、など様々。2020年に向け、たくさんのパラスポーツへの入り口を提供していきたいです。会場は大音響の音楽や大歓声に包まれていましたが、お相手のアナウンサーの声を直接、人工内耳に送るシステムを準備していただいたり、口の動きをしっかりと見たりすることで対応し、無事に中継を終えることができました。

<千葉絵里菜リポーター>

「パラアイスホッケーの魅力は、ぶつかっていいところ」という選手の言葉の意味、それを理解してもらうために、私たち、車いすユーザーは誰かにぶつからないよう、いつも心配しながら街に出ているのです、ということを伝えました。「千葉さんじゃないと言えない言葉」と、評価してもらえたのがうれしかったです。韓国のバリアフリーは進んでいない、という事前の情報だったのですが、私がお店に入ろうとするとそばにいたお客さんがさっと動いて持ち上げてくれたり、その自然な動きは素晴らしかったです。北海道時代に取り組んでいた車いすカーリングの経験が生き、恩返しができたと思いました。

<三上大進リポーター>

選手の知られざる魅力を紹介する「“It”なキュン♡パラアスリート」というプレゼン企画を担当し、選手のファッションやSNSで発信されているユニークな情報などを紹介しました。「スポーツの垣根を越えて楽しめた」という反響をいただき、もっと知りたいと言って頂けるような情報を伝えられた事実、胸が震えました。そして、インタビューをしたイギリスのテレビ局のリポーターやアメリカのスノーボード代表選手はじめ、世界の多くの方が、文化・食事・テクノロジーなど多くの魅力を持つ“東京”への大きな期待を語ってくれました。2020へ向け「世界から見つめられる東京」を切り取り発信していきたいと思っています。